

オイスカ中部日本研修センター設立50周年記念 寄稿文



私のフルネームはD. H ミル・シャリフ・ビオックです。日本では、シャリフと呼ばれていました。ボルネオ島として知られているマレーシアのサバ州の出身です。現在は、サバ州農村開発公社が運営するオイスカ・KPD青年研修センターの副所長をしています。

日本での研修期間は、1991年1月21日から1992年3月9日迄でした。

私が受けた研修コースは、訪日再研修として指導やコーチング法でした。

研修生へのアドバイザーとして、研修への取り組みや規則の理解、時間の使い方や宿泊施設の掃除割り振りなど生活指導面を先生の下で、指示を伝えながら、その指導方法を勉強しました。トラクターやコンバイン、草刈機などの操作指導や使用後の管理などもありました。

時に、日本語の出来ないパキスタン人ドクターの通訳やホームステイ先で桃の収穫の手伝いもありました。ホームステイ先のホストは大変優しく、引き続き滞在する様、申し出もありましたが、研修生への指導も私の役割であり、それも適いませんでした。他には、いろいろな機会に、「子供の森」計画の植林キャンペーンにも参加しました。

その後、1992年2月、岡崎市の農業協同組合での研修を受け、農家の支援を行っているシステムに大変興味を持ちました。職員は、私に農協におけるガソリン販売からスーパーマーケット、ライスセンター、銀行業務や産物の集荷などの実際を見せ、教えてくれました。

その時の農業協同組合の小川つねお組合長様には、大変、感謝しております。

日本のオイスカでの指導方法は、サバ州の青年研修センターでも同様に使われています。有機栽培での生産は、年々増収となり政府からの支援も減らすことが出来ました。農業用地は、全て活用し廃棄物も再利用する方法をとっています。

オイスカ総裁初め、職員や会員の皆様、中部日本研修センターでの研修の機会を頂けた事に、大変、感謝しております。

当時の杉浦利金所長さんからもスタッフでと申し出を受けましたが、研修センターでの重要な任務、当時の小杉辰雄所長の補佐としての役割が待っており、適いませんでした。

子供の森計画の中で、各学校での環境教育セミナーでの、日本人スタッフの通訳なども行い、1996年5月1日には、エグゼクティブ・オフィサーとなり、責任も更に増えました。現在は、センターの責任者となりました。

オイスカKPD青年研修センターは、1998年から2016年の間、1,121名の研修生を送り出し、今年も74名の研修生と7名の指導員がおります。

中部日本研修センターでの思い出は、甘く、苦いものがあります。冬、階段を下りて行く時、凍っていることに気付かず、滑って下まで落ちてしまいました。その時に、病院に運んでくれたあいわ先生（日本語の先生）には、今も感謝しております。また、センターの美味しい食事です。

私たちイスラムの断食月、朝3時の食事の準備を一ヶ月間してくれた食堂のお母さん達への感謝を忘れることは出来ません。

私の研修センターでは、日本人の規律、勤労精神、時間を守る、文化の尊重など良いところを取り入れ、若い人達に農業技術を教えています。

最後に、50周年を迎へ、皆様にお祝いを申し上げます。中部日本研修センターが更に、国際的に、また、尊敬されるセンターに、引き続きなれますようにお祈り申し上げます。